

合理化事業で農場移転 酪農経営の飼料畑集積を支援

① 宅地開発による移転で規模拡大（大津町 相馬牧場）

大津町は熊本市よりおよそ20キロ東方に位置し、平成16年度現在で、人口は約3万人。熊本市のベッドタウンとしてこの数年間で一気に人口が増加しつつある。

農業生産法人(有)相馬牧場(代表取締役・相馬慶生氏)も、今から10年以上前は、大津町の市街地近郊で酪農経営を行っていた。しかし、JR九州による「美咲野団地」という宅地分譲開発にあわせて移転することになった。理由は、このとき飼料畑の8割近い2ヘクタール近くが、分譲用地に組み込まれたからである。当時高校生だった長男の立志さんが後継者になるという意志を表示したこともあり、「10ヘクタールの集積された飼料畑の代替地」という条件を要望して、移転を決意。その意向に添って代替地として呈示されたのが、事業面積250ヘクタールにおよぶ、「大津北部県営畑総地帯総合整備事業」が行われている地区内の農地であった。



移転によって「作業効率が飛躍的に向上した」と話す相場さんと農地集積を支援した県公社の竹村参事(右)

合理化事業で分散した農地を集積

ところが、その代替地の地権者は26名と多く、相馬さん個人が相対売買で集積するのでは大変な労力がかかると苦慮していた。そこで、熊本県公社が介入することとし、土地改良事業前の従前地を規模縮小農家から、25件・44筆を平成4年度と平成5年度にかけて順次買い入れ、中間保有したあと、翌年一括して売渡を行った。その後50アール区画にはほ場整備された15筆の一時利用指定を受け、農地の集積が実現することになった。

長年の夢が実現した!

「酪農をやる以上は、牧場の周りに畑があること」は相馬さんの長年の夢であった。この移転によって見事なまでにほ場の団地化が実現し、まさに「長年の夢が実現しました」という。その集積効果は作業効率の向上ももたらしている。これまでは、分散してほ場整備も行われていなかった飼料畑では、1日に1ヘクタールの作業ができれば上出来だったのが移転後では、3ヘクタール近くの飼料畑作業が1日で完了できるようになった。

あわせて、夏はローズグラス、冬はイタリアンライグラスを栽培している牧草の生育状況を、常に確認することができるようになった。そのため、牧草の適期刈りが可能となり、牧草の品質も向上したという波及効果ももたらしている。ちなみに、10アールあたり1トン近く収穫した牧草は、すべてラップサイレージ処理をおこない、サイレージの通年給与を実現している。



適期に収穫されたラップサイレージが並ぶ

これまではどんなに分散していても借り入れていた相馬さんは、合理化事業で農地が集積された効果を実感してしまい、現在では「なんだか贅沢になっちゃって、集積されていないと、借りなくなっちゃいました」と、苦笑いする。それほどまでに、合理化事業の活用による農地集積が、相馬さんの酪農経営にもたらした効果が大きかったということであろう。

周囲の反対を振り切って…

ただし移転に際しては、家族だけではなく周囲の酪農家からも反対の声が多かったと、当時のことを回顧する相馬さん。その理由は、自宅から7キロ離れたところから農場に通勤することや、全然知らない地区によそ者として移転していくことなどであったという。

そのような苦難を乗り越えて展開してきた相馬牧場。平成10年には法人化して、平成12年には法人が「認定農業者」として認定された。さらに平成14年には、法人として農地を購入している。現在の経営地は21.5ヘクタールで、自作地が11.7ヘクタール、借入地が9.8ヘクタールである、このうち1.9ヘクタールが畜舎から800メートル離れているだけで、残りのほ場は、すべて畜舎を取り巻いている。

あわせて飼養形態も、移転を契機にフリーストールに変更した。「よく絞れるので、いったん無理して9,500キロ絞ったら、受胎率が落ちちゃいました」という相馬さんだが、現在の搾乳牛の乳量は9,100キロであり、移転前と比較すると着実に向上している。

この成果の要因は、牛群管理による飼料給与方式だと言う。乳雌牛のほとんどは、酪連に委託して北海道から購入してきているため、育成牛の飼育はおこなっていない。乾乳牛20頭ほどを別棟で飼育しているが、畜舎に収容できる120頭一杯の搾乳牛を飼育しており、牛群を2つにわけている。こうすることで、給与する飼料を調整したところ、飼料費の節減とあわせて乳量が増加したという。

更なる飼料自給率向上を目指して

粗飼料は自給飼料と購入飼料でまかなっているほか、配合飼料については15年くらい前に15名で出資して設立した農事組合法人から、毎日供給を受けている。これらを混合して給与しているが、自動給餌機によって牛群別の飼料給与体系となっている。

このほかに黒毛和種とF1を主体とした170頭の肉用牛を飼育しており、10ヶ月齢前後で出荷している。こちらの作業は、後継者の立志さんが主におこない、相馬さんと奥さんの扶美さんは、主に搾乳作業を行っている。

今後の経営展開について尋ねると、「これだけ経営地の集積による作業効率の向上を体験したので、これからも飼料用地の集積が目標ですね。隣接した農地が売りに出されたら、迷うことなく合理化事業を活用して購入しますよ」と、飼料基盤の拡大を行うことで、長年の夢だった「牧場の周りには畑！」を、さらに拡大しようとしている。

②都市的酪農から土地利用型酪農へ（御船町 野口勲一さん）

熊本市から17キロほど東南に位置する御船町も、熊本市のベッドタウンとしてこの10年間で人口が増加しつつある地帯である。主な農産物は米・野菜・葉たばこなどであるが、馬肉生産も盛んな地域でもある。

今回取材で訪れた「吉無田高原牧場」の野口勲一さん(61才)も、移転によって経営規模を拡大した酪農家である。

もともと熊本市で、50年くらい前から酪農を営んできたが、宅地化の波が押し寄せてきてしまい、60戸あった酪農家が2戸になってしまった。そのため、2ヘクタール近い飼料用地も離れて存在する、住宅街での酪農経営となっていた。



「移転ができたのは合理化事業のおかげ」と話す野口さん一家と農地集積を支援した県公社の高木業務課長(右端)

経営拡大を目指した移転を決意

今年の5月末に移転した現在の場所は、戦後に開拓された地域であり、20年前からは熊本市農協が肥育牛を飼育していた場所である。しかし、平成4年に農協が撤退してしまったあとは、放置されてしまっていた。

野口さんがその話を聞いたのは、8年くらい前で、以来、移転を検討していたが、次男の洋成さん(32才)から「後継者になってもいいよ」という言葉を聞いて一大決心。移転を決意した。

この移転に際して、熊本県公社の合理化事業を活用。42ヘクタール近い農地と原野は、11人の地権者から公社が担い手育成タイプで買い入れて、うち20ヘクタール近くを売渡し、残りの面積は、5年間の一時貸付けを行っている。

こうやって農用地は準備できたが、実際に移転をする段階では、悩みや苦労も多かった。そのうちの1人でもある、次男で後継者の洋成さんは、「知らない土地で本当にやっていけるのだろうか?」という不安が大きかったことを話す。一方で野口さん本人は、「洋成が後を継いでくれるなら、今の住宅街じゃダメだ」と考えていた。



合理化事業で集積された土地にこれからの夢が広がる

野口さんの人柄が移転を実現へ

父に「借金はあるな」といわれ続けてきたが、今回の移転に際しては、スーパーL資金などの制度資金を活用して、2,500リットルのバルククーラーをはじめ、規模拡大にみあう施設等の整備を図っている。

一方で、「初期投資を軽減しよう」と、5月末の移転の時には、朝の搾乳を終えてから、乳牛とともに、使用中のパイプラインミルクカーのユニットを分解して運搬・組み立てしたという。

「そのおかげで夜の搾乳が21時になっちゃいました。」と笑いながら話す野口さんだが、移転の際には、熊本市の酪農家が大勢手伝ってくれたという。このことは、野口さんの人柄がなせる業ではないだろうか。牧場の入り口にある「吉無田高原牧場」の看板も、その仲間がプレゼントしてくれたものだそう。

合理化事業をフル活用!

「今回の移転ができたのは、ホントに合理化事業のおかげですよ」と話をする野口さん。移転前の乳牛飼養頭数は、搾乳牛が30頭、乾乳・育成牛が20頭で生乳出荷量が250トン前後だったものが、搾乳牛が50頭、乾乳・育成牛が50頭と2倍近い増頭が可能になった。あわせて生乳出荷量も、今年度は360トン近くになる見込みとのことである。

規模拡大に呼応して県公社の農業用機械のリース事業も活用し、135馬力を有するトラクターをはじめ、バキュームカーやロータリーなど、大型機械の導入も可能になった。さらに合理化事業を活用して取得した42ヘクタール近い農用地は、ほとんど一団地であることから、作業時間が大幅に短縮されつつあるという。

取材時は、移転してちょうど2ヶ月が経過した時期だったが、畜舎や事務所などは、放置されていたものをそのまま利用している。さらに標高が500メートル近くと高いことから、日陰に入るとひんやり涼しい風が心地よく、「おかげで夏季の乳量低下もありません」と話す。

野草を利用した粗飼料給与

「うちではあまり高価なエサを与えてないんです」という野口さん。その理由を聞いてみると、現在飼育されている乳牛は、粗飼料多給型の飼養形態である。

その粗飼料源は、熊本空港で刈り取られる野草を無償で譲受している。その野草を乾草処理して給与しており、不足分はヘイキューブを購入してTMR給与している。配合飼料は、トウモロコシやビートパルプを若干給与しているだけとのことであった。

それでも搾乳牛の年間乳量は、7,500～8,000キロに達している。「無償といっても1ロールが300キロ近くあるので、4トントラックで1回に9個くらいしか運べないんですよ。」という野口さんだが、170ヘクタール近い空港で刈り取られる野草は、年間にして1,300ロール近くに達しており、飼料費の大きな節減効果をもたらしていると言えるだろう。



生まれたばかりの子牛・これからの古無田高原牧場の未来をつくる

大きな希望を胸に

「とりあえずの目標は、5年後に搾乳牛を、2倍の100頭にするのが目標です」と語ってくれた野口さん。住宅街での酪農経営から、一気に放牧飼育も可能になった酪農経営に転換したことで、野口さんの経営目標の選択肢も広がっているようだ。

その一角からは、冷たくてきれいな水が湧き出ている。高原地帯という立地条件と、きれいな湧水といった自然環境は、野口さん一家の健康的な生活はもとより、飼育されている乳牛にとってもすばらしい環境であるに違いない。これからの「吉無田高原牧場」の展開は、大きな希望に満ちあふれたものとなるだろう。

酪農経営の飼料畑集積を支援

- ①宅地開発による移転で規模拡大(大津町 相馬牧場)
- ②都市的酪農から土地利用型酪農へ(御船町 野口勲一さん)

(農地ふぁーむらんど No38 平成17年11月号掲載)